



志友会報

802-0985 北九州市小倉南区志井6丁目11-13
(株)網武出版 093(962)7740 FAX093(961)8224
Eメール: saigo@skyblue.ocn.ne.jp

本紙の年間購読は本体 3,000 円 + 税です。

合気語録

そうとは知らぬ王仁三郎は、虜の堂々たる図体と面構えを信用したのか、虜の言い種を真に受けて「虜將軍が、かつて七万の軍を率いて、庫倫を占領し、あの方面では大変なものである」と言っている。また聖師は予言者だと触れ廻っている。お筆先として大変なものだとも言っている。信者獲得に余念がない」と、同好者に自慢げに語ったという。

というので、一行は奉天、四平街、鄭家屯と進み、そこから内蒙古に入って庫倫を目指した。

当時この地域の軍閥は蒙古軍で、虜は二百騎ほどの兵を持って、兵隊が少くない部隊編成をしていた。威勢だけがよく、二百騎ほどの全軍を十部隊に分け、日月地星の旗を翻して進軍した。そして王仁三郎一行は、この集団とともに内蒙古へと向かったのである。

ところが蒙古に入るや否や、虜軍の先鋒隊がこの地域を縄張りとしていた山賊の土軍に襲われ、包圍されて、烈しい襲撃を受けたという。こうした中、朱福貴率いる部隊を合流して土軍と戦うことになった。

集団は朱の部隊との合流で、士気が上がったのである。虜軍はこれ鬼の首でもとったように、大いに氣勢が上がった。

王仁三郎は、小頭格の朱福貴に「これくらいの兵を集めて応戦できるか」と訊くと、朱は「二千人ぐらいいは地元から集められましよう」と答えた。

王仁三郎は満洲入りしたとき、既に「聖師」の名で呼ばれていた。また虜軍の配下も、王仁三郎を聖師と呼び、何処までも付き従うポーズをとっていた。

この時、王仁三郎には「我が威光を慕って」という自惚れがあり、各地保衛団に集合をかけた。直ぐに二千三百は集まるだろうと言った朱の言葉を信じて、高を括った観があった。虜占魁は一声発した。そこへ各地から保衛団

王仁三郎は、この時、続々と我が周りに集まる人員動員に得意絶頂であった。

虜の大將軍振りを見せつけられ、その大物振りと、鶴の一声で集団を作る虜の配下は、まるで聖師の御威光を慕っているかのよう

に映った。そして彼等が、神に付き従う神兵に思えたので、王仁三郎はこの保衛団の集合軍隊を「神兵」と唱えた。

しかし当時の中国にあつて、神兵とか、天兵とかは、過去の風習からすれば、許すまじき僭称であり、日頃から虜の軍閥を苦々しく思っていた張作霖は、これに激怒した。そして土軍に加勢して虜軍を包圍させ、王仁三郎一行に「誅罰」の一語を被せ、馬賊討伐の命を發したのである。

最初、虜に従った保衛団配下は、続々と名前を聞くだけで集まり始めたが、元々は寄せ集めの兵であった。その上、張作霖から「誅罰」の命が降れば、後込みして敗走するのは当然であった。

内蒙古の人口ハラシントンでの襲撃戦は、僅か一夜で決着がついた。虜軍は、木端微塵に潰されたのである。この時、王仁三郎は勘違いをしていた。

というのは朱福貴自身、官兵の襲撃を、一種のお祭り騒ぎと解し、もともと最初から戦う気がなかったというところを知らずにいた。更に馳せ参じた保衛団の面々は、大本教に帰依した連中ではなく、虜の命令一過で形式的に歓迎しただけであるということを知りなかつたのである。襲撃戦に対し

て、最初から逃げる気で居たのである。したがって、戦いになれば逃げるしかなくなるのである。

これに関しては、日本人の道案内役の岡崎鉄首も動揺していた。日本人一行もまた、朱福貴が逃がすものと思いついて、右往左往した王仁三郎らは全員捕えられ、金品を奪われた上に、肌着一枚の恰好で数珠つなぎにされて引き回されたのである。この中には植芝盛平を始めとして、他に四人おり、合計六名が捕まったのだ。こうなつた破目は、岡崎の裏切りの仕業であると王仁三郎は勘違いした。そして以降、岡崎は裏切りの汚名をかぶり、教団内の記

録から名前を抹殺されて、今日に至っているという。

捕えられた六人は即刻銃殺と決まり、刑場に引き出された。しかし王仁三郎自身は大胆不敵であり、銃殺と決まりながらも三首の辞世の句を詠んだ。目前の死を前に、他は震え上がっているのに、王仁三郎だけは悠々として何の躊躇いもなく、この連中のために、辞世の句の代作までしてやつたという。

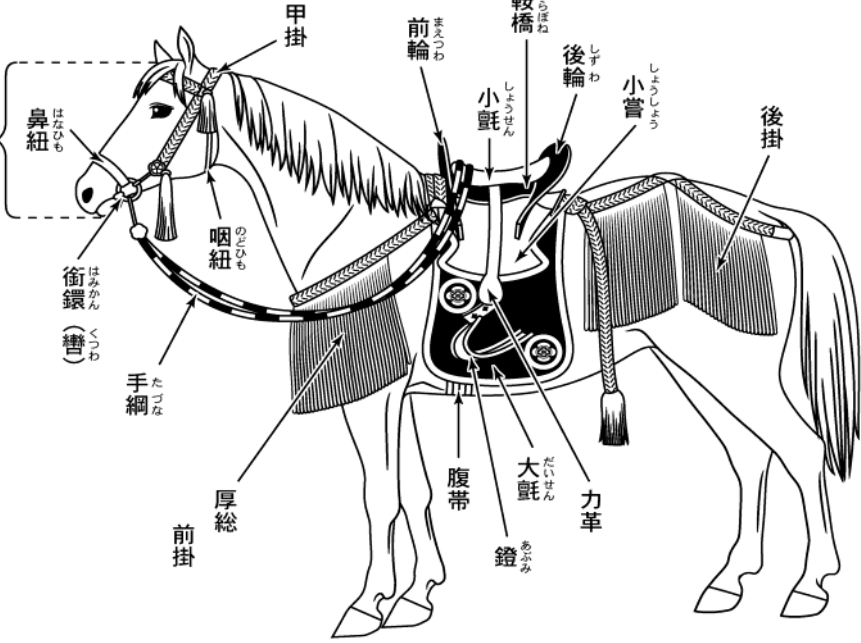
ところが、処刑寸前になって急に中止することになった。刑の確定された彼等は、再度に互る銃器の故障を理由に処刑が延期され、この背後に、日本の著名人を殺したとして勢力挽回の隙を窺っていたのである。

王仁三郎の蒙古入りは、宗教的な布教の目的がその第一だった。したがって地方の軍閥を纏めて、新王国を作るなど毛頭なかつた。しかし彼等の護衛役として、付き従った虜はその野心があり、虜自身は王仁三郎を利用して、虎視眈々として勢力挽回の隙を窺っていたのである。

王仁三郎の蒙古入りは、宗教的な布教の目的がその第一だった。したがって地方の軍閥を纏めて、新王国を作るなど毛頭なかつた。しかし彼等の護衛役として、付き従った虜はその野心があり、虜自身は王仁三郎を利用して、虎視眈々として勢力挽回の隙を窺っていたのである。

合気に通じる耶和良之術

その一



イラスト/曹川 彰

日本馬装図

組打は本来ならば、掛け手は身体を馬上から乗り出し、先手にて、相手の小手を取りに行つて、自分の方にグイと引くのであるが、「耶和良之術」を心得た者は、敵が手を出してきた時に、「吾が手を掴ませず、「抜手」(指指方向に切り上げる術)を切つて、逆に敵の手を掴んでしまつたのである。

ところが剛力の者は先手争いを競つて、互いに打手の手を先に握ろうとする。「外し手」と「掴み手」の攻防が繰り返されるのである。そして握つた瞬間、剛力に物をいわせて引き摺り落とすのである。したがって正直に組もつとする者は、必ず剛の者に引き摺り落とされる。

こうして敵を引き摺り落とした後、馬に角を入れて(馬を走らせる為)、両の鎧で馬の腹を蹴り、拍車を加える事(疾走させ、戦意を失つたところ)で、敵に鎧通しを突き立てるのである。この時、三郎家吉は巴に対してこうした組手術で對抗するつもりでいた。勝負はついたも同然の気持ちでいた。

ところが、いつものようにはいかなかった。三郎家吉は、巴の手を掴み引き立てようとした。すると三郎家吉は忽ちのうちに、巴に捻り伏せられてしまった。そして鞍の前輪(鞍橋の前の輪形が高まつた所)に押し付けられ、あつと言つ間に鎧を通して敵を掻き切られてしまったのである。

まず、彼女は馬上に足腰を押し付けて、「丹田の氣」(臍下丹田の氣)を下方に下げ、脚を締め、後輪(前輪と後輪を居木に取りつけ、鞍の骨組をなす後方部分)に当て鎧を踏み、姿勢を一旦確保しておいて、三郎家吉が手を出してくるところを待ち構えていたものと思われる。

三郎家吉は己の剛力に自信があり、その大力に物を言わせようとしたのである。

しかし巴としては、「待つてまじ」の体勢であり、三郎家吉の侮りたの理を見抜き、彼が「手取り」にするつもりで、鞍か尻を浮かした瞬間に捻り伏せたものと思われる。

この組打体勢は、巴が三郎家吉の組手を先手にとつて、逆手にして引き回し、そのまま鞍橋の前輪に押し付けたものと思われる。これが組打りである。

三郎家吉は小手捻りの要領で捻り取られ、次に小手返しの業で仰向けにされて、巴と彼の両馬間で、掛け橋のようになった処を、彼女は素早く鎧通しを抜いて敵を掻き切つたものと思われる。

こうした情況下、巴は関東武士が見ている環視の中であつてのけたのだから、それを視ていた大勢の武人達は、さぞかし彼女の凄さに度胆を抜かれた事であろう。 つづく

関西・近畿講習会講習会
 とき/平成 15 年 12 月 21 (日)
 午後一時~三時迄
 ところ/滋賀県立武道館
 (二階柔道場)
 大津市におの浜四丁目2-15
 JR膳所駅徒歩15分
 講習会費/一万円
 指導/曹川和翁家直伝
 指導内容/合気揚げ、力貴、合気下げ、一本捕り一箇条、二本捕り中伝儀法、壁掛け、ほか
 曹川宗家の講話 詳しくはホームページを御覧下さい。
 URL http://www.daitouryu.com/

西郷派大東流合気武術総本部

大東流靈的食養道HP

幸福をもたらしたはずの飽食の時代 人々が得たものは 一時の快楽と癒えぬ病 そして終わることのない欲の循環
 浅ましき食は 猥らな思考と暗愚な生活を 慎ましき食は 気高い思想と明晰な日々を
 真の健康へと至る道はすぐ側にあり 古の智慧にならい食餌を正しくすることが 人間が人間として 道理を取り戻す最良の法であると信ずる。

http://www.daitouryu.com/syokuyou/

新刊書籍案内

曹川和翁著 「大東流人身投げ」
 発行：株式会社愛隆堂

発売定価 1800円+税

〒802-0985 北九州市小倉南区志井6丁目11-13
 (株)網武出版 093(962)7740

